



Title	＜研究ノート＞ProfileからみたPhonologization : 認知言語学的視点からの音韻記述に関する「橋渡し」的考察
Author(s)	田村, 幸誠
Citation	大阪大学英米研究. 2023, 47, p. 39-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99591
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Profile からみた Phonologization

－認知言語学的視点からの音韻記述に関する「橋渡し」的考察－

As a beginning student, I asked a question about generative phonology that students have asked many times: do people go through these step-by-step derivations in their heads every time they pronounce a sentence? The answer was: No, of course not. So I asked the logical next question: then what makes derivations cognitively real if the intermediate stages never occur in the minds of speakers? I got the performance-competence answer: The intermediate forms are real in terms of competence, but not performance. Like other students of generative grammar, I soon learned to stop asking such questions, at least for a while.... George Lakoff, "Cognitive Phonology," (1993: 117).

田村 幸誠

1. はじめに

認知言語学で提唱されている言語を分析する際に用いられる様々な原理は、一般認知能力 (cognitive abilities) に根ざすドメイン中立的なものであるとされる (Langacker 1987: 1.1.2; 2008: 2.1.1)。その一方で、この 40 年にわたって活発に議論が行われてきた認知言語学の研究分野は大きく捉えたと主に「意味 (概念、および概念化) がどのように構文として形式化されるのか」や「1つのカテゴリーには、どのような意味的 (概念的) 多様性や制約が観察されるか」というように意味的側面が中心であったように思われる。言い換えると、例えば、Langacker (1987, 1991, 2008) の記号論的文法観は、語、句、文などの単位に関わらず、semantic pole と phonological pole が記号として常に一対として存在すると仮定するところに特徴があるが、その文法

的記述の中心は主に semantic pole での動態におかれ、その対となる phonological pole においてどのような（広い意味での）文法現象が起き、それがどのように認知言語学的に記述されうるのかに関して実質的な議論はほとんどなされてこなかったといえる。しかし、繰り返しになるが認知言語学の魅力でありそのテーゼは、統語、形態、音韻、意味などの文法領域に特化した原理や規則を立てないことにある。それ故、現在のように認知言語学的な意味記述、あるいは構文分析が活発になり、成果が出れば出るほどに、では言語のもう一つの主要な側面である「音」に関してどのような分析が可能になるのかを知りたくなることは当然であり、また、認知言語学が言語の一側面にのみに焦点を当てた言語理論ではなく、言語に対して包括的な言語理論を目指すのであるならば「音」、phonological pole に関する文法記述を充実させていくことはどうしても必要なことであると考えられる。

本研究ノートの目的は、上記の問題点を背景に、普段認知言語学の観点から意味（と形式の関係）を研究している研究者がどのようにすれば同様の視点から「音」を分析できるようになるのか、その「橋渡し」に関して具体的な分析・記述の提案を行うことにある。従って、本研究ノートでは読者として、ご自身の研究を「音」の領域にまで広げたいと考えるがなかなか普段意味を分析するにはいかに音声・音韻研究に二の足を踏んでいる方々や認知言語学の立場から音声・音韻研究を行う場合の方向性に関して知りたいと考えている方々を想定していることに注意されたい。もちろん、私自身も「音」の専門家では決していないが、「意味」に加えて「音」も、と認知文法の立場から包括的に言語現象を考察したいと考える研究者、また、フィールド調査などの言語記述に認知言語学的考察を加えたいと考える研究者と今後少しでも同じ場を共有したいと考えたことが本研究ノートの執筆動機である。

具体的な議論に入る前に、この「橋渡し」という本研究ノートの執筆動機をもう少し掘り下げるために、普段認知言語学を研究している人ならば想起されるかもしれない、認知言語学的観点から書かれた 2 冊の音韻論の本を取

り上げ、「橋渡し」という観点からその問題点を述べることにする。1冊目は、Joan Bybee の *Phonology and Language Usage* (2001 年、Cambridge University Press) であり、2冊目は Geoffrey Nathan の *Phonology: A Cognitive Grammar Introduction* (2008 年、John Benjamins) である。まず、Bybee (2001) であるが、使用依拠 (usage-based) モデルの観点から音韻分析ができる」と主張する内容であり、それ故、執筆の視点が音韻論者に向けたもの、音韻論者に認知言語学・使用依拠主義が何であるのかを説く形になっており、内容としては普段認知言語学的研究を行なっている者には馴染みの記述概念や理論的背景が中心に説明されるものとなっている。そして、その認知言語学の理論的説明に付随する形でこれまでの音韻論の議論や問題となる実例が散発的にテキストに埋め込まれる形で示されている。現在音韻論を中心に研究をし、ある程度音韻研究の全体像が分かっており、その上で新しい研究の視点として認知言語学を取り入れたいと考える研究者には、間違いなく、大変有益な本である。しかし、具体的な現象に関する実質的な音韻分析を一つ一つ独立させて議論するという形にはなっておらず、それ故、認知言語学の視点を通じて音韻に関する記述を実践しようと考えている研究者にとっては認知言語学的音韻分析の手本を示してくれるような説明にはなっていないという問題点が残る。

次に Nathan (2008) に移ろう。Bybee (2010) とは対照的に読者に音韻論の基礎を説明する形をとっている。しかし、その基礎的な考察と説明手順は実質普通の音韻論の入門書と変わらないものとなっている。例えば、生成音韻論の立場で書かれた音韻論の入門書である、Bruce Hays の *Introductory Phonology* (2009 年、Oxford University Press) と具体的に何が異なるのかが音韻論に精通しない者には分からないものとなっている。そしてその理由は Bybee (2001) と同じく、実質的に音韻現象に関する認知言語学的な分析と記述が展開されていないことにある。例えば、意味を中心に認知言語学を研究している研究者であっても、「音」においても同じプロトタイプ構造が反映されていることは容易に想像できる。例えば、音素 /p/ が [pʰot] ‘put’;

[ʃpɪk] ‘speak’; [stɒp] ‘stop’ と環境に応じて異音 (allophone) として生じることは分かるし、その事実は既存の音韻論の入門書でも説明されている。Nathan (2008: 615-622) はそれがプロトタイプ構造を表すと用語を置き換え、ネットワークの形で示すのだが、そのように置き換えた場合の利点やそういった異音の発見手順そのもの、あるいは、音変化そのものの説明にどのように認知言語学の考え方が活かされるのかが議論・例示されていない。従って、意味と同じように「音」に関する議論を実践したいと考える認知言語学の研究者には、やはり、その記述の手本を示してくれるようにはなっていないという問題が残る。

本研究ノートでは次の二つの提案を行いたいと考える。まず 1 つ目の提案として、「橋渡し」として、音声・音韻論者である、Larry Hyman と John Ohala の音声・音韻に関する一連の研究、特に、両者の研究で展開されている、phonologization (音韻化) という考えを理解することが認知言語学的に「音」を分析することの最良の手本となり、また出発点になるのではないかとすることである (Hyman 1976, 1984, 2013; Ohala 1993: 246)。実際、Hyman (1976, 1984, 2013) は、Givón (1971, 1979) で展開されている語用論と統語論の関係に関する研究を参考に grammaticalization (文法化) と phonologization の類似性を指摘している。その Hyman の指摘する類似性こそが認知言語学者にとって「音」を分析する際の視点を提供してくれることを考察する。一方、Hyman (1976, 1984, 2013) は、grammaticalization と phonologization は文法的には実質的に同じ機能を果たしているが、この両者を束ねる概念がないと述べている。本研究ノートからの 2 つ目の提案として、その文法機能はまさに認知言語学の重要概念である profile (Langacker 1987, 1991, 2008) という認知機能で統一的に捉えることができるのではないかとすることにある。言い換えれば、Larry Hyman と John Ohala の音声・音韻研究は、普段意味を中心に研究を進めている認知言語学者にとって最も馴染みのある分析概念の 1 つである profile という観点をそのまま「音」の研究に持ち込むための視座を与えてくれるものであると考えられる。

以下、まず、2 節で *profile* の概念を簡単に振り返り、その上で、3 節で、Hyman (1976, 1984, 2013) 及び Ohala (1993) で議論されている *phonologization* を示すとともに、その音韻分析に対する具体的な認知言語学的アプローチを述べることにする。

2. Profile

では、*profile* という認知言語学で用いられる概念を *phonologization* という概念の説明につなげることを前提に振り返ることにしよう (*profile* の詳しい議論は Langacker (2008: 3.3) 等を参照されたい)。認知言語学では、下の図 1 にあるように、「意味」は、喚起される概念的な *base* を基盤に、それに対してそのどの下位部分が指定・焦点化されるかによって決まるとされる。そして、概念 *base* に対して下位部位の指定・焦点化を行う (より *prominent* な部位にする)、この主體的な認知機能のことを特に *profile* と呼んでいる。

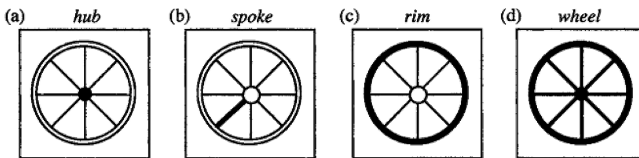


図 1 Langacker (2008: 67)

図 1 において *profile* される部分は特に太く示されているが、重要なことは同じ概念 *base* であっても、*profile* される部分によって、*hub*、*spoke*、*rim*、*wheel* と意味が異なること、そしてその意味の差は概念 *base* と *profile* の関係によって作り出されていることである。言うまでもないが、例えば、(a) の *hub* において、その *profile* 部分だけを取り出しても *hub* とは理解されないものになる。あくまで概念 *base* とその下位部位の指定・焦点化という二つのこととその関係が各構文 (個別の語や句や節) の意味 (*semantic pole*) を規定する上で重要なのである。

同様に、1つの構文が共時的に多義の構造を示したり、通時的に意味変化を起こしたりすることも profile の変化 (profile shift, e.g. Langacker (2008: 66-68)) であると考えることができる。このことを以下確認していこう。まず、図 2 において、(a) から (e) において概念 base として全て同じものが喚起されていることを確認されたい。

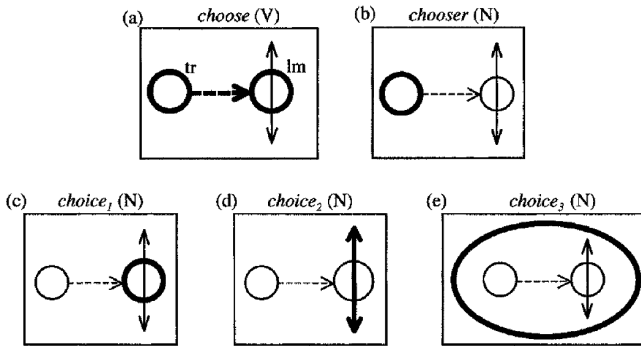


図 2 Langacker (2008: 100)

profile の中に 2つの参加者がある場合、より際立つ方が tr (trajectory)、tr を理解するための基準・参照点として存在する、あるいは、tr の動作が働きかける対象として存在するものは lm (landmark) と呼んで profile 中の参加者は区別される。(a) において動詞 *choose* の意味構造が記述されているが、tr は *choose* の行為者、lm は行為者により選択されるものが表されている。そして矢印は tr から lm へ動作としての働きかけがあること、そしてそこには時間的展開があることが表されている。この矢印は太字で書かれているため、この tr から lm への働きかけとそこに内在する時間的展開も等しく動詞 *choose* においては、profile されていることを表している。

このことを前提に、(b) の名詞 *chooser* の意味「選ぶ人」は、同じ概念 base から profile を *choose* の行為者に絞った結果得られる意味であり、一方、(c) の名詞 *choice*₁ の意味「選んだもの」は、profile を (a) における lm に絞った結果得られる意味と理解される。(d) の名詞 *choice*₂ は「選択肢

がある」という意味での *choice* の意味が記述され、(e) では事態の時間的展開が *profile* から外れ、それを背景にしてあくまでも事態全体を意味として捉えた場合の記述、つまり、名詞としての「選択」の意味が表されている。繰り返しになるが、意味 (*semantic pole*) を決定する上で重要なのは喚起される概念 *base* に対してどの部分が焦点化、つまり、*profile* されるのかということにある。

以上のことを踏まえて、次の (1) を考察してみよう。

- (1) “Semantic Structure is language specific, involving layers of “conventional imagery.” “Semantic structure” is conventionalized conceptual structure, and “grammar” is the conventional symbolization of semantic structure.” (Langacker 1991: 102)

先に、概念 *base* と *profile* の関係が意味を規定すると述べたが、認知言語学では、論理構造に基づく形式的な意味論とは異なり、意味は言語固有 (*language specific*) のものであると考える。概念 *base* に主観的な *profile* がなされ、それが意味としてユニット化し記号化されると規定される (記号の *semantic pole* を形成する)。仮に同じ概念 *base* が喚起されていたとしても言語ごとに *profile* される下位部位が異なる、つまり、意味が異なることは当然のこととして予想されることになる。例えば、「衣服を身につける」という同じ行為であっても、英語ではシャツでもズボンでも靴下でも *put on* という動詞で言い表せるが、日本語では腰より上のシャツは「着る」、腰より下のズボンと靴下は「履く」となる。一方、韓国語では、シャツもズボンも同じ「입다 *ipta* 「着る」」になり、足 (*foot* の部分) が強調される靴下に対しては異なる「신다 *sinta* 「履く」」を用いる必要がある (see Bowerman 2005: 215-216)¹。同じ概念 *base* を喚起していると想定される場合であっても、そのどこに *profile* が当てられて記号化されるかは各言語の慣習化に任されることになる。同様に、例えば、日本語の過去時制形式の「た」は、形

式的に繫辞する動詞の動作結果が発話時まで残っていると考えられる・感じられる場合（**current relevance**）でも、そうでない場合でも用いることができる。一方、英語では前者の意味が感じられる場合、つまり、**current relevance** が **profile** されている場合は、特に現在完了形式（*have + past participle*）を用いる必要があり、過去時制（*-ed*）の使用は **current relevance** が **profile** されていない場合に限られる。しかし、一方、ドイツ語では英語の現在完了形式に相当する文法形式を **current relevance** が **profile** されていない場合でも日本語の過去時制形式「た」と同じように用いることができるという特徴が観察される（より細かな概念 **base** と **profile** の関係に関する議論は Langacker (1991: 215-216) を、また過去時制形式に関しては、田村 (2021: 216-218) をそれぞれ参照されたい）²。

意味を中心に認知言語学を実践する研究者は構文を記述する際に、概念 **base**（またはそれに相当するもの）とその下位部分のどこに **profile** が当てられているのかを検討することでその構文の特徴を明確に記述しようとする。「音」の分析においても概念 **base** に相当するものの視座を与えられさえすれば、これまでの意味分析の知見を活かした、認知言語学的な「音」の記述が可能になると考えられる。次節では、「音」の記述において「概念 **base** と **profile** の関係」に相当するものは何かをテーマに議論を行う。

3. Profile と Phonologization

では前節で見た認知言語学の主要概念である **profile** を用いてどのように音声・音韻の記述が行えるのかを見ていくことにしよう。以下では、Hyman と Ohala で取り上げられている **phonologization** という概念に着目し、特に、鼻音化母音（**nasalized vowels**）が音素として形成される通時的プロセスをその具体事例として取り上げる。このことを通じて、「音」記述における「概念 **base** と **profile** の関係」の理解を深めたいと考える。

まず、具体例として、通時的に鼻音化母音が音素として形成されるプロセ

スを考察することから始めよう。下の (2) を考察されたい。

(2)	/pen/	—(I)—>	[pẽn]	—(II)—>	/pen/
	(話者)		(実際の発音)		(聞き手)
	(Phonology)		(Phonetics)		(Phonology)

(2) のプロセスにおいて示されていることは、(I) 話者が /pen/ ‘pen’ という発音の意図 (intention) を持って、/pen/ を発音すると、実際の発音において、末尾子音 (coda) に鼻音 n があるために、母音 /ɛ/ が後続の鼻音の影響を受けて必然的に程度の差はあれど鼻母音化する ([pẽ]) ということである (この必然的・ということに関しては下で再度議論を行う。また、帯気音 (aspiration) など他の要素の出現はここでは省いている)³。しかし、(II) 聞き手は /pen/ を理解する際に、その母音に生じた鼻母音化の部分を (他の雑音も含め) 捨象して話者の意図した /pen/ を正確に聞き取っているということである。

フランス語などの言語では、通常の母音 (口腔母音) に加えて、鼻母音が音素として存在し、語の意味の区別に貢献することが知られている (e.g. *laid* /le/ ‘ugly’ vs. *lin* /lẽ/ ‘flax’ (Ladefoged 2012: 183))。そして、重要なことは、鼻母音を有する言語は必ず口腔母音を有しているという事実である。Ohala や Hyman では (3 a) や (3 b) のような音変化の仮説を立てて、鼻母音が生成されるプロセスを説明している。シンプルに考えると、母音 (V) の後ろに末尾子音として鼻音 (N) がくると、その環境がきっかけ (trigger) となり、まず母音の鼻音化が起こる。やがて、母音の中で副次的に生じていた鼻音が、宿主である鼻音の末尾子音が伴わなくても鼻音化された母音として単独で認知される様になる。さらに、その単独で独立した音としての認知は、本来の末尾子音 (N) が存在する環境以外でも鼻音化母音の出現を可能にし、結果、口腔母音と対立する存在、つまり、語の意味の違いを作る音素としての鼻母音が形成されるということである (より詳しくは Ohala 1993:

247-248)。

- (3) a. $VN > \check{V}$ (Ohala 1993: 247; Hyman 1984: 69)
 b. anticipatory nasalization: /an/ → [ã] > ã^N, ã:, ã (Hyman 2013: 5)
 c. /pen/ → [pẽ] → /pen/ (Normalization, a hypercorrection) (= (2))
 d. /pen/ → [pẽ] → /pẽ/ (Hypo-correction)

この音変化のプロセスを Ohala (1993: 248-249) に寄った形でもう少し詳しく説明する。(3 c) と (3 d) をご覧いただきたい。実際の我々の会話において、例えば 1 つの語を聞き取る場合であっても、騒音などできちんと聞き取れない状況であったり、話者の個性的な発音であったりとその語の様々な発音の変種に(ある意味、その語が発音されるたびに)出合う。従って、聞き手は絶えず、例えば、(3 c (=2)) で示したように、聞いた音を正常化(normalization, hyper-correction の一種、詳しくは Ohala (1993)) して聞く必要に強いられる。Ohala (1993) によれば、音変化が起きるのは、(3 d) に示したように、聞き手が正常化に失敗し、発せられた音声の変種をそのまま聞いてしまう時に多くの場合生じることである。このプロセスは、(3 c) の hyper-correction に対して hypo-correction と呼ばれる (Bybee (2012) における両概念の議論も参照されたい)。この hypo-correction が音変化の重要な一側面であるというのが Ohala の一連の研究の主眼点である。

この Ohala や Hyman による鼻音化母音から鼻母音に至る音素の生成プロセスの分析が妥当なものであるとして、では、そもそも母音が鼻音化するとはどういったことなのだろうか。profile という記述概念を用いた認知音韻論的分析に移ることにしよう。まず、図 3 をご覧いただきたい。

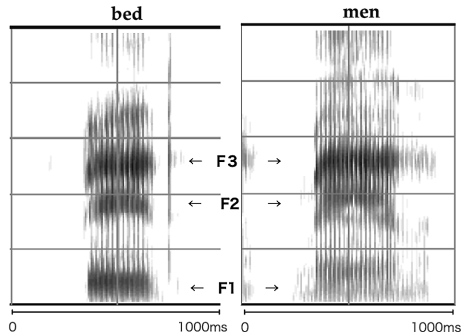


図3 Ladefoged (2012: 183)

(原典の図の一部を切り抜き、formant 位置の情報を加えたもの)

Ladefoged (2012: 182) によると、鼻音化母音は口蓋帆が下がって息が鼻腔に抜けるため、口腔内での母音の音色を司る主要な共鳴が弱くなるという。従って、鼻音化母音には主に次の3つの特徴が観察されることになる。(i) 通常の口腔母音と比べて第1フォルマント (F1) (と第2フォルマント (F2)) の振幅 (amplitude) が弱くなり (スペクトログラム上では色が薄くなる)、また、(ii) そのバンド幅もほやけて広くなる。加えて、多くの場合、(iii) F1 の周波数の上昇も観測されるという (鼻腔に息が抜ける特徴による) (see also Hyman (1984: 69) ; Ohala (1993: 243) ; Ladefoged and Maddieson (2008: 299))。この3つの特徴は、図3において、bed の母音と鼻音子音に挟まれた men の (鼻音化) 母音を比べると容易にわかる。men の母音の方が bed の母音に比べて、F1 (と F2) において色が薄くなっており、また、バンド幅も広い。加えてこの場合、men の方の母音では F1 が左から右に向かって少し上昇している特徴も併せて見てとることができる。このことを踏まえて、まず何より興味深いことは、F1 においてこれほど違いが生じていても、英語話者にとって、/bed/ と /men/ は、どちらにおいても、母音が同じ /e/ として解釈 (construe) されることである。

次に、フランス語の口腔母音の *laid* /ɛ/ ‘ugly’ と鼻母音の *lin* /ɛ̃/ ‘flax’ を表したスペクトログラムを考察してみよう (図4はフランス語母語話者である

Sébastien Delbes 先生（大阪大学人文学研究科）に発音していただいた音声
を筆者が Praat により解析した画像である）⁴。

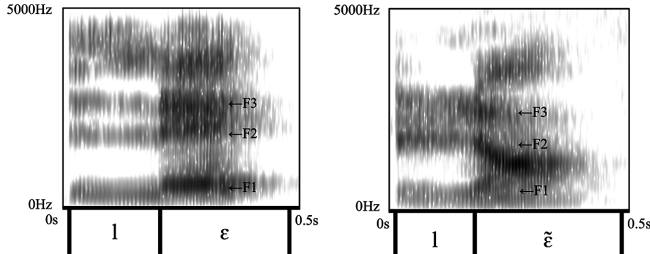


図 4 *laid* / ϵ / ‘ugly’ と鼻母音の *lin* / $\tilde{\epsilon}$ / ‘flax’

図 4 において、（図 3 ほどははっきりしないかもしれないが、）前段落で見た鼻音化母音の F1 の特徴の全てが見てとれる。まず、/ $\tilde{\epsilon}$ / は / ϵ / に比べて F1 の色が薄く、何より、バンド幅が / ϵ / に比べてぼやけたものになっている。また、/ ϵ / の F1 が真っ直ぐであるのに対して、/ $\tilde{\epsilon}$ / の F1 は右斜め上に上がっているように読むことができる。先に、上で示した鼻音化母音の 3 つの特徴を示していても英語では *men* の母音は *bed* の母音とは異なったように解釈されないことを述べた。一方、フランス語ではこの 3 つの特徴が現れている場合、*laid* / ϵ / ‘ugly’ と *lin* / $\tilde{\epsilon}$ / ‘flax’ という様に音韻的に異なる母音として解釈されるのである。

前節において、概念 *base* のどの部分を焦点化、つまり、*profile* するかで意味が決まり、それが *semantic pole* として機能し記号化されるということを考察した。*phonological pole* においても同じことがいえるというのが本稿の提案である。つまり、音声学的な入力（以下、「音声ドメイン」と呼ぶ）が先の概念 *base* と同じ機能を果たし、その音声ドメインのどの部分が焦点化、つまり、*profile* されるかによって各構文の *phonological pole* が決定され記号化されると考えるのである。上の図 3 と図 4 をもとに、フランス語と英語の違いを *profile* の観点からまとめると、フランス語は、F1 の（口腔母音とは異なる）3 つの特徴、特に F1 の共鳴の強さの度合い（濃淡の差）を

profile し、その音声ドメインと profile の関係を慣習化している（故にフランス語には鼻母音が音素として存在している）。一方、英語は、その特徴を profile しない、つまり、母音の F1 の共鳴度合いの差に関しては何も慣習化していないと記述することができる（故に英語には鼻母音が音素として存在していない）。もちろん、図 3 や図 4 で用いたスペクトログラムがそのまま semantic pole における概念 base に対応すると述べている訳ではない。ただ、音声ドメインが可視化されるという点においてスペクトログラム等は大変強力な装置であり、また、それは図 1 や図 2 において概念 base を図表化し、可視化したものがそのまま実際の話者の頭の中に喚起されている概念 base でないことと同じであるといえる。

では、この内在的に存在するものの一側面に焦点を当て、際立った (prominent) 存在に変えるという profile という認知能力を音声・音韻記述に持ち込むことの有効性をもう少し詳しく見てみることにしよう。次の図 5 をご覧いただきたい。

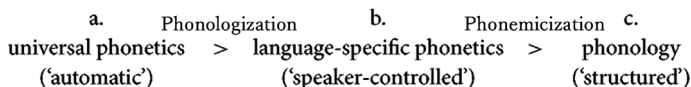


図 5 Hyman (2013: 7) に一部加筆したもの

図 5 を通じた Hyman の主張の一つは、従来の「普遍的な音声学」(図 5 a に相当する)と「言語固有の音韻論」(図 5 c に相当する)という 2 分法は、歴史的な音の変化や共時的な音の変種の問題、さらに、より根本的な問題として、そもそもどういう形で言語固有の音韻の体系が構築されるに至ったのかを考察するには不十分で (see Hyman 2013: 4)、その中間に、普遍的な音声学の特徴から個別言語で使われる音韻特性をリクルートしてくる段階、すなわち、「言語固有の音声学」(図 5 b) を設ける必要があるということにある⁵。そして、このリクルートしてくるプロセスを Hyman は特に、phonologization と呼んでいる。このことを別の形で表現すると下の図 6 のようになる。

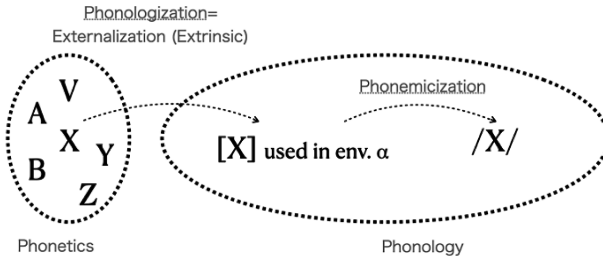


図 6 Phonologization (Externalization) と Phonemicization

図 6 では、ある音声の内在的特性 (intrinsic properties) の 1 つ、X が、phonologization によって、外の (extrinsic) 世界、つまり、個別言語の音韻領域の中に対応関係を持つようになることが示されている (phonemicization に関しては本節の最後に述べられている)。

さらに、Hyman はこの phonologization の段階において起きる特徴的なこととして、下の (4) に示したことを挙げている。

- (4) a. A phonetic effect is exaggerated beyond what can be considered universal,
- b. A ‘categorical’ rule of phonology must refer to the phonologized property.

Hyman (2013: 6, 1984: 70 ; 下線は筆者)

図 5 a の段階で普遍的であった音声的特徴の中から、一つの要素が、個別言語の音韻現象としてリクルートされる際、その度合いが誇張され (exaggerated) (4 a)、そして、(4 b) にあるように、各言語の個別の音韻規則は、その音声的な「誇張」を記述しようとするものであるという主旨である。

では、この phonologization の段階で「誇張」が起きるということをもう一度英語の *pen* の発音を事例に、今度はその頭子音に注目して確認してみ

よう。/pen/ は [p^hen] と発音される（ここでは鼻音化等の側面は捨象している）。/p/ は [p^h] と帯気音を伴った形で発音されるのが普通で、英語においては、「語頭と強勢の置かれた音節の頭子音位置にある無声閉鎖音は帯気音を伴った発音になる」という慣習がある。従って、例えば、日本語の感覚で帯気音を伴わない形で [pen] と発音すると違和感のある発音になる。逆に日本語では、「ペン」の発音は [peN] で十分であり、[p^heN] と帯気音を伴った形で発音すると違和感を覚えるものとなる。これは日本語には英語のような帯気音化の慣習がないからである。先の (4 b) に従うと、英語は日本語と異なり無声子音の帯気音化を言語の特性として取り込んでいるということがいえる。

ではそもそもこの無声子音の帯気音化という特性はどこからくるのであろうか。(4 a) の性質をもう少し考えてみよう。[aaapaaa] という発音を考察してみよう（以下の音声学的説明は Catford (2001: Ch.3) を参考にしている）。言語音の物理的・生理的特性を扱う音声学のレベルで考えると、[aaapaaa] は、実質、どの言語のどの話者が発音しても同じ音になる。加えて、(音声記号では表記していないが) 最後から3つ目の [p] の後ろの [a] は、必然的に、[p] により口が閉鎖していたものが開き、また閉じた口の中では空気圧が高まっているため、他の [a] に比べて少し音が大きくなり、また、発音のタイミングも少し遅いものとなる。つまり、閉鎖音 (stop consonant) と母音 (V) の組み合わせにおいては僅かながらではあるが帯気化が調音上の必然として内在化しているといえる。前段落の [p^hen] と [peN] の議論を (4 a) の観点から見ると、閉鎖音と母音の連続で必然的に生じる（僅かな）帯気音の存在に気づき誇張して自らの言語に取り入れたのが英語で、そうでないのが日本語であるといえる。

認知言語学の立場から考えると、この潜在的な特徴の中からある特徴を選び、特別に誇張し、言語体系の中に取り込むという Hyman の指摘する phonologization という重要な音韻プロセスは、まさに、(前節、及び、先の鼻音化母音の例で見たように、) profile という認知機能の表れであると考え

ることができる。意味の領域において、(高次の文化的概念や複雑な概念を除いて)喚起される基本的な概念そのものは普遍的なものであると考えられる。各言語間の違いはその喚起される概念 base のどの下位部位が焦点化されるのかということにある。そして、その概念 base と profile の関係が記号の semantic pole を形成する。音声の領域において、普遍的な音声ドメイン(音声学的入力)のどの下位部位が焦点化されるのかが各言語の音韻体系の違いを作り出し、各構文においては、両者の関係が記号のもう一つの側面である phonological pole を形成すると考えるのである。またこの考えにより、profile という認知能力は、概念であれ、音声であれ、ドメインに関係なく言語外の特徴・特性に焦点を当て、より prominent な存在にして、言語の中に取り入れる機能であると統一的な説明が可能になる。ここで下の(5)に挙げた、Langacker (1987) の巻末にある用語集(glossary)の“profile”の項目を見てみよう。

- (5) “The entity designated by a semantic structure. It is a substructure within the base that is obligatorily accessed, functions as the focal point within the objective scene, and achieves a special degree of prominence (resulting in one level of figure /ground organization).” (p.491)

本稿の提案は、profile という重要な認知能力は意味だけでなく、音においても、記号の両側面において重要な働きをするということにある。どちらの極(pole)においても profile が記号構造(symbolic structure)の極の性質を最終決定するものであると考えるのである。

最後に、図 5 b から c への音変化(Phonemicization)も確認しておこう。図 5 c の段階は、その音が環境から予測されない状態でも用いられるようになる、つまり、独立した音素に変化するプロセスを示している。英語の無声閉鎖音の帯気音化は生ずる環境が決まっているため、まだ図 5 c の phonemicization の段階に達していないと判断できる。一方、例えばタイ語な

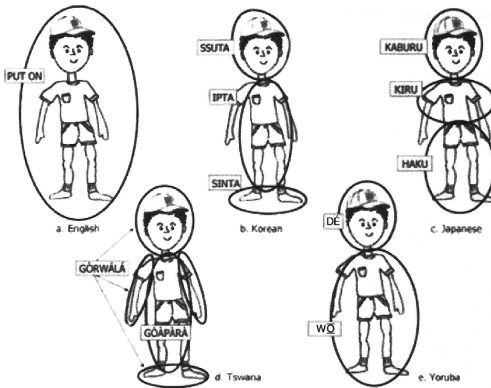
どでは、帯気音化された無声閉鎖音はそうでない無声閉鎖音（及び有声閉鎖音）と対立することから、図 5c の段階に達していると考えられる（p^h a: ‘cloth,’ p a: ‘aunt,’ b a: ‘crazy’ (Ladefoged 2012: 140)）。

4. 結語

本研究ノートは、認知言語学の観点から普段意味（と形式の関係）を研究している研究者が、どの様にすればその研究領域を言語のもう一つの重要な側面である「音」に拡張できるのか、その「橋渡し」をテーマに議論を行った。さまざまな音声・音韻論の理論がある中で、本研究ノートでは音声・音韻論者である、Larry Hyman と John Ohala の音声・音韻に関する一連の研究、特に、両者の研究で展開されている、phonologization という考えを理解することが認知言語学的に「音」を分析することの視座を与えてくれるという提案を行った。そのことの理由は、意味を分析する認知言語学者が意味を記述する際に用いる概念 base と profile という分析手法がそのまま「音」の記述にも応用できるからである。2 節で Langacker の profile と概念 base の考え方を簡単に振り返った後、3 節で主に鼻音化母音の通時的発達のプロセスを具体事例にして、phonologization という考え方を紹介しながら、「音」の認知言語学的な記述を、特に、（概念 base に相当する）音声ドメインと profile の関係を明確にする形で行った。

注

- 1 次の図は Bowerman (2015: 216) より引用。また、韓国語に関しては徳山聖美先生にご確認いただいた。記して感謝申し上げます。



- 2 ドイツ語に関して、大阪大学人文学研究科の小川敦先生、中村綾乃先生にもご確認いただいた。記して感謝申し上げます。
- 3 調音プロセスを詳しく知りたい場合は Ladefoged (2012: 182-184) を参照されたい。端的に述べると、例えば [n] の場合、舌先が歯茎につく前に、口蓋帆が下がるため、前の母音の鼻音化が起きるのである。
- 4 この吹き込み調査に関して大阪大学人文学研究科の林千宏先生からもアドバイスをいただいた。お二人の先生に記して感謝申し上げます。
- 5 音声学 (phonetics) と音韻論 (phonology) の伝統的に指摘される違いを簡単に振り返っておくと、言語音の物理的・生理的特徴を扱うのが音声学で、その物理的・生理的に捉えられた「音」が各言語でどの様に体系の中で使われるのかを考察するのが音韻論である。次の引用は Catford (2001) より: “The study of the physiological, aerodynamic, and acoustic characteristics of speech-sounds is the central concern of *phonetics*. The study of how sounds are organized into systems and utilized in languages is the central concern of *phonology*...” (Catford 2001: 177). また、使用依拠モデル的な記述の試みとして、松浦・田村 (2022)、及び、その基礎調査である、田村・松浦 (2022) も参照されたい。

参考文献

- Bowerman, Melissa (2005) “Why Can’t You “Open” a Nut or “Break” a Cooked Noodle? Learning Covert Object Categories in Action Word Meanings,” *Building Object Categories in Developmental Time*, edited by L. Gershkoff-Stowe and D. H. Rakison, New York: Psychology Press, 209-243.

- Bybee, Joan (2001) *Phonology and Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan. (2012) "Patterns of lexical diffusion and articulatory motivation for sound change," *The initiation of Sound Change: Perception, Production and Social Factors*, edited by M.-J. Solé and D. Recasens, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 211-234.
- Catford, J. C. (2001) *A Practical Introduction to Phonetics* (2nd Edition), Oxford: Oxford University Press.
- Givón, Talmy (1971) "Historical Syntax and Synchronic Morphology: An Archeologist's Field Trip," *Chicago Linguistic Society* 7, 394-415.
- Givón, Talmy (1979) "From discourse to syntax: grammar as a processing strategy," *Discourse and Syntax*, edited by T. Givón, New York: Academic Press, 81-113.
- Hayes, Bruce (2009) *Introductory Phonology*, Oxford: Wiley-Blackwell.
- Hyman, Larry M. (1976) "Phonologization," *Linguistic Studies Offered to Joseph Greenberg, vol.2*, edited by A. Juilland, Saratoga, California: Anma Libri, 407-418.
- Hyman, Larry M. (1984) "Form and Substance in Language Universals," *Explanation of Language Universals. Linguistics* 21, edited by B. Butterworth, B. Comrie and Ö. Dahl, 67-85.
- Hyman, Larry M. (2013) "Enlarging the Scope of Phonologization," *Origins of Sound Change: Approaches to Phonologization*, edited by Alan C. L. Yu, Oxford: Oxford University Press, 3-28.
- Ladefoged, Peter (2012) *Vowels and Consonants* (the 3rd edition revised by S. F. Disner), Oxford: Wiley-Blackwell. ((邦訳)『母音と子音：音声学の世界に踏み出そう』(田村幸誠・貞光宮城,) 東京：開拓社. 本文中のページ番号は原著に沿っている)
- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (2008) *The Sounds of the World Languages*, Oxford: Blackwell.
- Lakoff, George (1993) "Cognitive Phonology," *The Last Phonological Rules: Reflections on Constraints and Derivations*, edited by J. Goldsmith, Chicago and London: Chicago University Press, 117-145.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar vol.1: Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

- Langacker Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- 松浦幸祐・田村幸誠 (2022) 「音声学基盤音韻論からみた方言習得：阪大生による大阪アクセント習得における 2 つの壁」研究会発表 (国立国語研究所：多言語・多文化社会における言語問題に関する研究), (2022/11/27), the handout is available at: <https://researchmap.jp/read/0119623/presentations/40585301>.
- Nathan, Geoffrey S. (2008) *Phonology: A Cognitive Grammar Introduction*, Amsterdam: John Benjamins.
- Ohala, John (1993). "The phonetics of sound change," *Historical Linguistics: Problems and Perspectives*, edited by Charles Jones, London and New York: Routledge, 237-278.
- 田村幸誠 (2019) 「nonce nominalization と lexical nominalization：音と意味の類似関係に関する議論も含めて」研究発表 (第 9 回認知文法研究会), 於 大阪大学, (2019/3/16).
- 田村幸誠 (2021) 「使用依拠モデルに基づく言語観」『認知言語学の基礎 (認知日本語学講座 第 1 巻) 碓井智子、田村幸誠、安原和也 (編), 東京：くろしお出版, 197-265.
- 田村幸誠・松浦幸祐 (2022) 「方言習得に関する一考察：非関西圏出身大学生の京阪式アクセント習得をめぐる調査結果を基に」『時空と認知の言語学 XI』, 29-38.